

第5章 介護と家族 —グループホームにおける認知症高齢者の生活—

妹 尾 香 織

問 題

今日、少子・高齢化に加えて、高度情報化、グローバル化の進展に伴って、人間関係のあり方は大きく変容してきているといわれているが、その背景には倫理観・価値観の変化があると考えられている。本研究では、人間関係の基盤となる家族と地域社会に焦点をあて、そこに見られる関係の有り様を、援助行動、特に、家庭内における高齢者介護といった観点から明らかにすることを目的としている。

本研究は、家族内の援助行動の実態解明を目的として、認知症高齢者を介護する家族に焦点をあて、介護における家族の絆を明らかにすることを目的としている。

まず、「介護と家族研究」の第一稿として、グループホームで生活する認知症高齢者を対象とした参与観察と聞き取り調査からなるフィールドワークの結果を示す。このフィールドワークは、認知症高齢者と家族の関係を検討することを目的としているが、本稿では、家族と離れ新たな生活の場であるグループホームで認知症高齢者がいかなる日常を送り、入所後家族とどのような関わりを維持しているのか、認知症高齢者に対する介護がどのようなものであるかについて整理した。

方 法

フィールドの選定

グループホームとは入居対象者の方達で共同生活を送り、スタッフと共に食事の支度、掃除、洗濯などの日常生活を家庭的で落ち着いた雰囲気の中で過ごし、認知症の症状の進行を穏やかにすると共に、お互いに助け合い、思いやりのある場をいう。この様な場での生活は、認知症高齢者やその家族にいかなる影響を及ぼすのであろうか。

本研究では、認知症高齢者とその家族について検討するために、認知症高齢者が家と同じ様に毎日の生活を送るグループホームを選定した。具体的には、A市にあるグループホームである。このグループホームは、入所者にとって落ち着ける空間であり、自分のペースで時間を過ごす事を目指しており、でフィールドとして選定した定員6名（2006年11月時点）のグループホームのほか、デイサービスセンターやショートステイ、および居宅介護支援センターも併設されている。場所は、市街地にあるため外部施設と交流しやすいが、入り組んだ小路や古い家並など静かな地に建っており、散策も気軽にできる自然環境に恵まれたグループホームといえる。

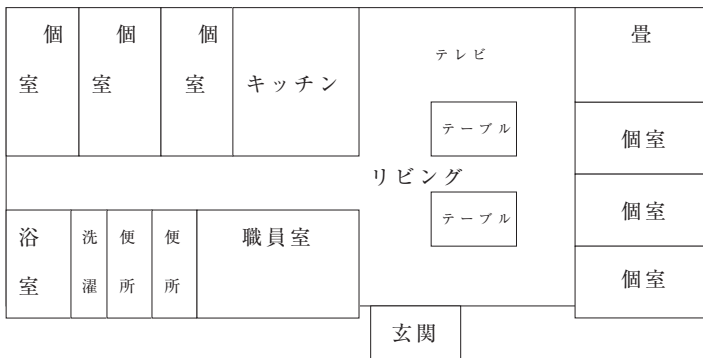


図1 フィールドの風景（グループホームの見取り図）

そして、そこで生活する認知症高齢者6名および介護職員（正職員5名、シルバー人材センターから派遣のスタッフ3名の計8名、性別は全員女性、以下、職員と示す）、グループホーム訪問者（家族など）を研究対象とした（以下、利用者と略記する）。なお、観察時間内には計8名の介護職員のうち2～3人が、夜間は1名が勤務していた。フィールドの風景として、グループホームの見取り図を、図1に示した。

データ収集の詳細

データ収集は、2006年11月中旬から2007年4月上旬の期間中、利用者の生活時間内に、大学生1名（女性、以下、観察者と示す）が、福祉を勉強中の学生としてフィールドに入り、利用者の日常に合わせて一緒に過ごしたり、職員から聞き取りを行った。なお、フィールドワーク開始については、筆者が事前に現場責任者に研究趣旨を説明したうえでフィールドワーク実施の了承を得、また、プライバシーの保障のもとに研究成果の公表について了解を得ている。

同期間内で観察者が計13回、筆者が2007年9月下旬に1回の参与観察を行った。具体的には、参与観察実施計14回のうち、13回は昼間観察であり、9時半から18時の時間帯内で実施され、1回の滞在観察時間の平均は4時間48分であった。また、17時から翌日10時までの時間帯に、1回夜間の活動観察を実施した。

記録は、1日の流れを中心に、観察者が利用者とのどのような関わりをしたか、また、利用者の様子や利用者同士あるいは利用者と介護職員との相互作用の実態を中心に、観察日中に観察ノートにまとめられた。観察ノートには、参与観察中に得られた利用者の発言や行動に対する観察者の感情や、職員から聴取した情報なども合わせて記された。

こうして、収集された記録に基づいて観察者と筆者が観察日翌日から2週間内で、観察内容の意味解釈や次回の観察ポイントの確認などからなるカンファレンスを実施して、フィールドワークを進行させた。カンファレンスは、調査

期間内で、1回1時間半から2時間程度、観察回数分実施した。そして、観察記録とカンファレンス記録の両方に基づいて、①利用者が日常生活の中でどのような暮らしをしているのか、②職員や他の利用者とのどのような相互作用があるのか、③家族との関わりはどのように焦点をあてて、記述と解釈を行った。

なお、結果の公表については同意を得ているが、以下の結果に記載している内容は個人が特定されないよう若干の脚色を加えている。

結果と考察

フィールド風景の概要

グループホームにおける利用者と職員の1日の流れを、図2に示した。このタイムスケジュールは標準的なものであり、利用者の生活の流れは、生活・活動内容やそれに要する時間は流動的に変化する点、また、利用者が可能な日常の生活は利用者に行ってもらおう点が、グループホームにおける利用者の生活の大きな特徴であった。

まず、朝の起床時刻は、職員がチャイムや呼びかけなどにより一斉に利用者に起床を促すのではなく、各利用者による。早い人では、4時半頃から起床した気配が感じられるなど、各利用者のペースで1日が始まる。そして、利用者の起床の頃合いをみて職員が声かけや誘導により更衣洗面をすすめていく。その際、職員はなるべく手を出さず、利用者ができることは利用者に行ってもらおうという対応であった。

洗面後は、リビングにて全員でゆっくりと朝食をとる。食事については、調理は職員が行うが、毎食の準備や後片付けなどこちらも利用者に行ってもらおうという関わりであった。具体的には、6名の利用者のうち5名はほぼ毎食、机を拭いたり、自分の食器を運んだり、あるいは、食後に職員が洗った食器を拭くなどの職員への援助的な作業を行っていた。食事介助が必要な人

は6名中0人であった。与薬の服用が必要な利用者は、6名中4名で、薬の管理と与薬は職員が行う。与薬では、錠剤を除く薬については包装をとった薬を利用者の手のひらにのせてその場で利用者に飲んでもらい、その後、口を開けてもらって上手く飲めたかどうか確認が行われる。

朝食後は、しばらく自由な時間が流れ、新聞を取りに行ったり、食事の後片付けをしたり、テレビを見るなど利用者それぞれで自由に過ごす。朝食後に利用者が新聞の回し読みをしている間に、職員がトイレ掃除を行うのが通常の朝の風景であった。

午前の休憩後は、洗濯干しと掃除を職員と利用者と一緒にやる。天気のいい日は外へ出て、各自自分の洗濯物を干していく。早く終わった利用者は、全員が使用するタオルを干すのを手伝う作業も行ってた。洗濯と掃除が終了すれば、お茶の時間である。職員によると、高齢者は水分を取ることが重要とのことで、一日のうち午前と午後のお茶の時間と入浴後の水分補給があり、生活スケジュールや職員の援助は利用者の健康に留意したものであった。

昼食も朝食時と同様であるが、時折外食も行われる。午後は午前と比べて、比較的ゆったりとした時間の経過で、この時間帯に、職員と利用者が買い物に行ったり、施設内のメンバー全員で出かけたり、テレビを見たり、自室で身体を休めたり、遊んだりと自由に過ごしている。その合間におやつ時間があつたり、また、その日の洗濯物の片付けや入浴の準備がなされる。入浴は、職員が血圧や体温など利用者の体調を確認して、順番に入浴する。入浴後の夕食も朝、昼食時と同様の手順である。

夕食後は朝の起床と同じく、早く休む利用者や、遅くまで起きている利用者もおり、それぞれ自由に過ごし、それに合わせて職員が口腔ケアの援助など就寝ケアを行っていく。夜中に、トイレや話をしに起きて来る利用者もおり、職員はその都度それに対応する。このようにして、翌日を迎えるのがグループホームの1日の流れである。

本グループホームにはシルバー人材センターからの派遣職員が3名おり、利

用者と比較的年齢の近い職員が介護職員として従事していた。また、職員と入居者が全員女性であり、食事の下ごしらえなどの準備や、後片付け、洗濯物干しなど、生活の中には気ままな雰囲気と会話があふれていた。その一方で、入浴の順番など、待っている間に「私を誘ってくれない」や「私が一番先」など集団生活にみられる人間関係上の細かな葛藤場面も見られた。

参与観察中の家族の面会¹⁾は、14回中2回みられた（観察日：2月26日、9月30日）。

利用者6名の属性（性別、年齢、生活歴、観察あるいは職員からの聞き取りによる性格特徴、介護度）は表1のとおりである。

グループホームにおける利用者の日常

利用者がグループホーム内で、職員や他の利用者と相互作用しながら生活する様子について、食事と掃除、および自由時間のエピソードを示す。なお、「」は会話内容を、「」内の（ ）は注釈を示す。

食事 グループホームでは、食事の準備と後片付けなど、利用者が可能なことは職員と利用者が一緒に取り組んでいる。食事の始まりと終わりにテーブルをきれいにする事の多くはBさん、Fさんが進んで行った。そして各自、食事を取りに行ったり、箸を配ったりと自ら動く人、声かけと誘導により食事を取りに行く人など様々である。後片付けで職員の手伝いをする人もいた。食事がお好み焼きの時は、利用者らは目の前で焼きあがるのを待ち、出来たてを食べるためか、普段は積極的にお箸が進まないCさんも普段よりも多く食べた。一方、普段は食欲のあるEさんはお箸が進んでいなかった。これは、ご飯の時に使用した器が普段使用しているものと異なるためであったが、普段の器に交換すると食べられた。なお、食事時やお茶の時間に各自が使用するコップや湯飲

1) 利用者がグループホームにおいて、家族といかなる相互作用を維持しているのか、また、グループホームでの生活の開始とともに、それまで介護の授受関係にあった親子関係あるいは配偶者間といった家族の関係がいかに変化していくかについては、今後の調査結果と合わせて、別稿で報告する。

	起床ケア…更衣、洗面介助	朝食準備…配膳、与薬
7:00	朝食…見守り、与薬	
8:30	(日勤者出勤)	トイレ掃除、洗濯干し、掃除
10:00	お茶	
10:30	(遅出出勤)	玄関扉開錠、ゴミ出し、昼食準備
11:30	昼食の準備	
12:00	昼食…見守り、与薬	
13:00	自由時間	
15:00	おやつ、洗濯物たたみ	
15:30	バイタル測定	
16:00	(夜勤者出勤)	入浴、玄関施錠、入浴後の水分補給、夕食準備
18:00	夕食…見守り、与薬、夕食後のデザート	
20:00~21:30	就寝ケア…与薬、トイレ誘導、口腔ケア	
~4:00	巡視	

注1：()内は職員の出勤時刻

注2：バイタル測定とは体温や血圧の測定をいう

図2 標準的なタイムテーブル

表1 グループホーム利用者の属性 (N=6)

A
1) 女性、82歳、介護度3
2) 専業主婦(家事・手伝い)および農業
3) きっちり者。執着心がやや強い。
4) 自発的な行動が少なく、感情表現が少ない(医者の所見によると医学的なものだろうとのこと)
5) 長男
B
1) 女性、89歳、介護度2
2) 洋裁が好きで、金融機関に勤務していた。
3) 世話好き。年上の方にたいへん気を使う。簡単な計算が可能。
4) ある程度自立しており、6人の中で中心的存在。また、世話好きである。
5) 末っ子の長女
C
1) 女性、86歳、介護度3
2) 不明
3) 情緒に大きな波がある。独特な世界に入る。
4) 空腹時など帰る願望が強くなる。会話が成立しないことが多い。
5) 末っ子の長女
D
1) 女性、80歳、介護度3
2) 未婚で独居生活を送る。デザインの仕事をしていた。
3) 不安感がある。弟が心の支えの様子。
4) 自分の視界に入るものに対してどうすればいいのか分からず、常に不安を抱えて周囲を確認する事が多い。
5) 実弟
E
1) 女性、86歳、介護度4
2) 和裁(着物など)をしていた。
3) 話好きで器用である。「忘れてしまう。」という不安な本音も聞かれる。
4) 仕事を頼まれると積極的に働き者ある。廊下を手すり持ちながら歩く事が多い。
5) 長男
F
1) 女性、83歳、介護度1
2) 金融機関に勤務していた。
3) ある程度自立している。簡単な計算が可能。
4) 積極的に行動するが、Bさんや、Dさんとの関係でストレスを感じている。
5) 夫

注1) アルファベットは入居者を示す。

注2) 1)は性別、年齢、介護度を、2)は入所前の生活歴を、3)は性格特徴を、4)はグループホームでの生活上の特徴を示す。5)は入所時に報告のあった責任者(家族)を示す。

注3) 3)と4)は、観察と職員からの聴取により記述しているが、なるべく職員の表現で記した。

みは利用者個人所有のもので、色や形もさまざまであった。これらは、入所時に家族から持たされたものや、入所後に購入されたものである。また、食事時には雰囲気も大切であった。食事時に、テレビがついているか否かでは会話の量が異なる²⁾など、食事時の雰囲気や食器の違いが利用者の摂食行動に影響を及ぼしていた。これら雰囲気作りや利用者が使用する器などは、グループホームでの利用者の不安の少ない安定した生活のための、一緒に生活する職員、あるいは離れて生活する家族が利用者にもせるさりげない気配り行動であると考えられる。

掃除 清掃は、職員によれば、特別養護老人ホームでは専門スタッフが担当するが、グループホームでは各自の居室は利用者が行っていた。Eさんは自分の部屋を掃除する際、どうしたらいいか分からない様子で観察者が「ここからここまで（手で示しながら）まず一緒にやりましょうか。」と声かけをし、具体的に利用者が理解できるように動作を伴って伝えた。すると利用者は、同じ所を雑巾で拭く事もあったが、丁寧に一生懸命に作業するEさんのペースに合わせて見守りを行った。職員によると、「利用者には、上から指図を与えるのではなく、対等な目線を忘れてはいけない。」との事であった。また別のケースでは、膝の痛みがある、あるいは、足元が危ない利用者にはモップなど支えとなるものを用意するなど、できる事を利用者に行ってもらうためにはケアする側のさりげない配慮が必要であった。掃除が終わった後は、徹底して手洗いやうがいを行った。その際も手洗いやうがいの方法が分からないDさんとEさんにBさんとFさんが教える姿が見受けられた。

グループホームでの掃除は、清潔を保つ以上に、利用者に取り組んでもらうことが重要視されていると考える。掃除における職員の利用者への主体性を引き出すことを目的とした援助は、夫や妻、あるいは子どもが各自の社会的あるいは家庭的役割と時間的流れのなかで集合して生活する家庭の生活のなかでの

2) 食事時にテレビをつけるかの決まりはなく、当日出勤の職員による。テレビをつけることでの食事時の会話が活性化するかどうかはテレビの放送内容による。

実現は難しいと思われる。

自由時間 家族に出す年賀状を書いた（観察日：12月16日）。EさんとFさんはしっかりとした達筆な字で、AさんとCさんは職員からの声かけと誘導により、お手本見ながら、また、Dさんは職員に手を支えてもらいながら仕上げた。利用者はそれぞれ、何を書こうか悩んだり、出来あがった年賀状を互いに見せ合ったり、楽しそうにすごしていた。年賀状作成という通常とは異なる作業であるとともに、新年のあいさつを通じての家族への思いが湧き上がったためか、職員と利用者あるいは利用者間の相互作用がさかんであった。

Aさん、Bさん、Dさん、Eさん、観察者の5人で坊主めくり³⁾を行った（観察日：3月9日）。Bさんは、ルールも把握してゲームの進行に反応し、他の利用者にゲーム方法を教える姿も見受けられた。Dさん、Eさんは1枚ずつカードをめくる事が難しいため、事前に取りやすい様にずらしておくなど配慮した。Aさん以外の利用者はルールが分かっていない様だったが、1つ1つに対して観察者が「このカードすごいですよ。」と声かけをしたり、説明を加えると、その時その時の状況で喜んだり、自然に笑い声が出たり、表情が明るくなるなど変化がみられた。

このように、利用者が家族と離れ、グループホームで充実した時間を過ごすためには、似たような症状を持つ利用者らそれぞれの個性を引き出し、つなぐ仲介者の存在が有効であることが示唆された。

利用者と家族

利用者と家族の関わりについては、行動観察により見うけられた利用者から家族に対する思いや行動に関するエピソードを、表2に示した。

このように、グループホームで生活する利用者にとって、家族の存在は、思い出すとつらくも楽しくもある存在であることがうかがわれた。現在家族と同

3) 坊主めくり 絵柄のカードを使うゲーム

表2 利用者と家族に関するエピソード

家族との思い出 外に職員と利用者で昼食を食べに出かけた（観察日：12月26日）。食事中に好き嫌いの話をした時、Dさんは父親の事を話した。「食事を残したり、わがままを言うとなぐく怒られ厳しい人だった。兄弟が多くて食事の取り合いをした事もある。」と楽しそうに話した。

帰宅願望 早朝、Cさんは「家に帰りたい。どこに行ったらいいですか。」と言いながらウロウロしていた（観察日：12月16日）。観察者が「まだ時間が早いでもう少し待ちましょうか。」と利用者のそばで見守る方法をとった。しばらく続いたが話しているうちに落ち着いてきた。

家族の訪問 Dさんが一番信頼を寄せている実弟が訪問に来た（観察日：2月26日）。Dさんは普段よりもさらに表情が明るくなり、「何しにきたの。」と冗談をいい、嬉しそうになしぐさや表情を見せた。Dさんは普段から「弟と一緒に（グループホームへ）来たのにおいて帰った。（弟は）どこ行ったのかな。」「弟、来てないかな。」と入口辺りをのぞくなど普段の行動からも弟への親しみや愛情がうかがわれるが、弟が面会に来ると、Dさんはどうしたらいいか分からないのか会話が少なくなった。

家族にまつわる利用者間の相互作用 Dさんと弟の面会場面を見ていたCさんは笑顔も多く機嫌が良い様子であった（観察日：2月24日）。CさんはDさん家族に対して「みなさんお変わりないですね。達者ですね。」と声かけをしていた。そして普段はCさん自身の口からそれまで聞いたことのなかった兄弟の話を少しした。

居していなくとも、家族との思い出があれば、職員や他の利用者とのグループホームでの食事時や自由時間の会話で、感情が活性化したり、場がなごむなど、現在の利用者の生活を支える効果があると考えられる。

まとめと今後の課題

調査の結果、掃除後の手洗いやうがい、自由時間中など、グループホームでの日常生活のなかで利用者同士が、助け合う場面が多く見られた。利用者間の相互作用は、互いの家族を含む生活歴の想起にも影響を及ぼしていることが示唆された。

職員は、介護の専門家として利用者の生活を援助していたが、その援助内容

とは、食事、睡眠にかかるサポートだけではなく、薬の管理や下着など身の回りの買い物の付き添いなども含まれていた。そして、これらの援助は、各利用者の要介護度を基準にするだけではなく、利用者の人となりや日々の感情の流れに合わせて行われていることがうかがわれた。介護職員の視点での認知症高齢者との関わりを分析し、専門家が果たす家族機能の解明も今後の課題である。

福祉の動向編集委員会（2007）によれば、介護保険の要介護認定者の2人に1人が認知症といわれており、なかでも認知症ケアは今後も重要視されると考えられる。昨今家族は多様化しており、介護という状況においても、グループホームなどの家族外のサービスの必要性は高まることが予想される。グループホームにおいては、食器の使用にとまどいを見せる利用者に、職員がさりげなく利用者に使い方を示すなど、個人の尊厳を守りながらさりげなく援助する様子が多く示された。介護という援助授受をめぐる、人は援助者あるいは被援助者の立場でどのような介護を望み、実現しようとするのかについて解明することが必要であろう。

ところで、認知症の症状は、今までの体験や最近の出来事の記憶を失う「記憶障害」、時間や自分のいる場所がわからなくなる「見当識障害」のほか、「失語・失行・失認・実行機能障害」や、抽象能力や判断能力の低下や、不安や依存などさまざまな症状がある（柴山，2007）。それぞれの症状には、初期、中期、末期があり、悪化すると認知症者本人も本人を支える家族にとっても身体的にも精神的にも負担が大きいとの指摘もある（室伏，2000）。今後、認知症高齢者を抱える家族に焦点をあて、グループホームやその他の外部サービス利用の経緯や、介護以前の利用者（認知症高齢者）との関係と現在の関係、利用者や介護職員に対する思いなどを、面接調査を通じて明らかにすることが課題である。

引用文献

- 室伏君士（著）2000 痴呆老人への対応と介護 金剛出版
社会福祉の動向編集委員会（編）2007 社会福祉の動向 2007 中央法規
柴山漠人（2007）認知症治療、予防の最新情報 認知症介護、8（1）.

注）本研究のデータは、花園大学社会福祉学部西村智美さんと共有しており、研究結果の一部は西村さんの平成19年度花園大学卒業論文にまとめられている。

